【書　評】

加藤典洋『日本という身体——「大・新・高」の精神史』

（1994年，講談社）

竹　中　千　春

わざわざ好き好んでこの親の元に生まれてきたわけではない——芥川の描く河童のように生まれる前に「おまえはこの世界へ生まれてくるかどうか，よく考えた上で返事しろ」とは聞かれることもない。これはまた，私たちと国の関係でもある。実際，国および，国を支えている「国民」という「共同体」なるものは，血を受け継いだ親よりも，さらに不条理な存在として，私たちに問答無用に覆いかぶさってくる。

継承して誇りにもなり得にもなる過去ならばともかく，恥となり損失ともなる過去を，この国に単に生まれたという，ただそれだけの理由で，物心ついた時から己れの身に引き受けるべく教育されたり，逆に，この国の将来を担うべき若者として能力を開発し奮い立たされたりする。「戦争責任」論に対する素朴な反発と無関心は，無理からぬものである。そして，ほとんどの者にとって，国を選ぶ機会はないにもかかわらず一定年齢になれば，「有権者」として政治的権利を行使する，共同体メンバーとなるように制度化されている。

この，「国民」とか「共同体」的なるものの持つ，体にまとわりついてくる「ぬめ」のような存在性，不条理性を，「身体」という言葉で表現した点に，加藤氏の鋭さがある。従前より，自分が「感じる」こと，感受性に自由と人間存在の根拠を主張してきた著者にとって，本著で取り上げたテーマは，「日本的なるもの」を体現する日本的共同体が，「閉ざされた言語空間」として人々を「呪縛」してきた，少なくともそのように表現されてきたことをどのように捉えるか，そして，共同体的「呪縛」からの解放が，先人達の努力にもかかわらず，失敗してきたのはなぜかということである。

この種の言説の特徴は，この「呪縛」から逃れるためには，天皇制を廃止し，交戦権を回復し，「どこにもない『外部』」に立たなければならない等と，いずれも実行，実現困難な課題が掲げられることにあったが，さて，この結果どうなったかといえば，いま，わたし達のまわりにあるのは，たとえば，どのようにあがいても日本語でなされるわたし達の営為には「もののあわれ」的心性がつきまとい，それから逃れることはほとんど不可能だといった，宿命論の横行なのである。(1)

著者は，「日本的なるもの」の解体の試みがことごとく失敗の憂き目をみてきたのには，はっきりとした理由があると言い，丸山真男から柄谷行人まで，「日本的なるもの」という「穴」に落ちて幽閉されたとき，「穴」を上へ上へと脱出しようとしたからだと指摘する。丸山は，「日本的なるもの」の淵源に本居宣長の語った「自然」を置き，これを徂徠の「人為」によって克服しようとしたが，著者によれば，いずれも「落ちて行った穴」，つまり「日本的なるもの」を上って出ようとして結局は失敗したのだという。

わたし達は，この逆，還元を中途半端にとどめず，この日本的還元の産物（構築物）としての「身体的なもの」をさらに還元し，いわばこの共同身体をつきぬけて個的身体性ともいうべき地点にまで出る以外，——「落ちて入った」この穴を「落ち」きる以外——，この拘束からの出口をもたない。(2)

日本的共同体は「身体」としての肉体のように，人を閉じこめる「穴」のように，個人を拘束する。だが，「人間の自由は共同体のなかにあってしかも共同性をつきぬけるものであることのうちに根拠をもっており，人は共同体のうちにいて共同体をつきぬけることではじめてその共同性からの自由をもつ」——加藤氏の自由論，共同体論である。(3)それでは，「日本的なるもの」とは何だろうか。

本論は，近現代日本を1910年・1941年・1972年で区切って論じる。明治維新以後1910年の大逆事件までを「第2章『大』の膨張」，その時代を終わらせた1910−11年を「第3章　1910年の閉塞」で議論し，それから太平洋戦争勃発の1936年までを「第4章『新』の切断」

で，そして戦時期を「第5章『高』の密度」，戦後期を「第6章『中』のまどろみ」として連合赤軍事件のあった1972年まで包括する。

「日本的なるもの」は「日本という身体」として共同体的に感得されてきたのであるが，「身体」が木枠に入れたパン種のように，次第に大きく膨らみ（「大」），枠に沿って上に伸び（「新」），そして枠の中で緻密になる（「高」）。スケールの大きなこと，大きくなることが主題となった「明るい明治」の時代，日露戦争以後の「しぼみ」の時代を越えようとする革新の，大正から昭和初期の「新」の時代，「高度国防国家」として成長した「高」の戦争時代を経て，アメリカの下での戦後復興期を「中」の時代として捉える。著者が，『中央公論総目次』通算1000号を見て，時代によって「形容のイメージ基質」が変遷することから着想を得た時期区分であり，パン種の成長を妨げるような「閉塞」が訪れる時点を区分の鍵としている。(4)

125年間におよぶ近代国家としての日本の「身体」の変遷が，このように提示されるが，著者によれば，日本における「国民国家建設（nation-building）」とその展開，限界性の露呈，終わり，そしてその後の軍国主義時代，戦後とつながる。1910年までの「国民国家建設」の時代にのみ，維新の志士や明治の元勲にとって「国家」「天皇」と自分の間には「親子のような一体感」があり，自分が成長することは即ち国家が大きくなることだという幸福な一致が，彼らに自由の感覚を与えた，とする。

加藤氏の著作自体，専門とされる文学の領域を越えた批評をめざしておられる。評者は，文学を理解する力に恵まれていないし，したがって以下で述べることは，ずぶの素人の的はずれな議論にすぎないかも知れない。しかし，専門の異なる，社会科学と地域研究に携わる者の立場からのコメントもまた，国際学をめざす学際研究の上では全く無意味ではないかもしれないと自らを励ましつつ，三点に絞って議論してみたい。

第一は，「日本的なるもの」という概念について，である。「日本的なるもの」があたかも「自然」な，所与のものとして捉えられるのは「中途半端な還元」であったと，著者は批判する。かつて，代表的著作『アメリカの影』において，加藤氏は，江藤淳の文芸批評の軌跡を辿り，アメリカという外圧と高度成長によって明らかになった戦後日本のナショナリズム，もしくはその不在を議論した。反米主義を柱にした江藤の主張は右翼的な改憲論に転じたが，その際「アメリカは必要である」という立場から抜けきれず，腰砕け的に，単にアメリカと肩を並べる日本になればよい，という楽観主義に陥るのはなぜかを追求し，保守から左翼に共通の戦後思想の弱点を描き出した。

> 江藤はいわば，日本人の内面でなにかが枯死しかかっている一方で，いわゆる「近代」の実質たる日本人の社会的成熟からも程遠い，つまり確固とした日本的自然はすでになく，確固とした日本的近代もまた，まだない，という，そうした「日本」に直面しなければならなかったのである。(5)

日本のネーション，「日本的なるもの」はいつ頃から形成されたのかという単純な問いに対する答はなかなか見当らない。それはすでに存在すると主張される一方で，逆に不在が嘆かれているのである。本書でも，「日本的なるもの」は，必ずしも正面から定義されてはいない。それこそが，この問題の鍵であろう。加藤氏は，次のように表現する。「事ここに至れば」しかたがないという「時勢主義」で開戦の詔勅も終戦の詔勅も貫かれているが，そこには「わたし達自身にすら気づかれずわたし達に信じられてきたもの」が描き出されている。これが「日本という身体」だ，と。(6) そして「身体」として成長し，限界に突きあたり，爛熟する。

日本的自然を解体することが西欧化と近代化の運命であるとすれば，そもそもかつては存在したはずの「自然」は，ネーションの起源ではあっても，ネーションそのものではない。むしろ日本的自然の存在した社会は，鎖国体制の下で，対外的な危機意識のないまま，階級的・地域的に人々を分断する社会構造を深化させたのであった。したがって，福沢諭吉は，明治初年に「日本には政府ありて国民なし」と表現せざるをえなかったし，維新以後の半世紀，本書で指摘される日露戦争後頃までは，日本というネーションを建設する熱気を帯びた時代を経験した。(7)

亀井俊介は，こうしたナショナリズムの本質を，次のように言う。「ナショナリズムとは，どうも，変動するネイションが，一方で自己の本質（ナショナリティ）を探求しながら，他方でそれを主張し宣揚するという性格をもつもののようだ。それはしばしばひどく威勢がよいが，そのじつ，いわばゴールに到達した者の精神行為ではなく，ゴールにむけて走っている者の，自己激励，自己命令をふくんだ精神行為のように思われる。そして当然，それは自己崩壊の危険を胎んでいる。したがってま

た，常に緊張感をもってもいる。[8]」そして，その緊張感が，何よりも，知識人のメディアとしての文学に表現されたのである。

アメリカ文学を主題に持つ亀井は，日本文学におけるナショナリズムの時代を，アメリカのそれと比較しながら論じ，一貫してナショナリズムの精神に体現されるきわどいバランス，「相対主義」を重視する。それは，愛国主義であるとともに，国際社会における自国の位置を確認するという点で相対的なバランスの上に成り立っており，自国社会の歴史に起源を求めるために過去に顔を向けるとともに，自国の将来を切り開く上で未来に顔を向けるという点でも相対的なバランスを要求する。「ロマン主義の精神をもちながら，すぐれたリアリストでもなければならない……『ナショナリズム文学』は，ほとんど阿吽の呼吸をもっての綱渡りのようなものである。」彼の説に従えば，軍国主義的な国粋主義のナショナリズムは，このバランスの緊張に耐えられなくなった後の，一方に偏したものだということになる。[9]

ここで，「身体」という言葉もしくは概念の広さを理解していない者の乱暴な印象を述べれば，日本というネーションを「身体」として表象するとき，すでに，加藤氏が主張するような個々の人間の感情の前に，ひとつのまとまりとしての日本的共同体が，あたかも既に厳然と，まるで一人の人間の体のように在るという仮定から出発しているように思える。先述したように，「身体」であるからこそ，一体として成長したり行き詰まったりするのであるが，日本人がおしなべて共に手を携えて共同体の膨張過程に参加するという概念こそ，近代的であり，「身体」と表現した時点で，一種の堂々巡りの議論になってしまう気がするのは，浅薄な考えであろうか。そして，その堂々巡りを，加藤氏はまさに批判しようとしてきたのではないか。

かつて「国体」という言葉が内容の乏しい「日本的なるもの」を覆い隠す美辞となったように，「身体」という言葉は，説明を要しないものとして，「日本的なるもの」を表現してしまうのではないか。現実に「戦後民主主義」の危機を迎えながら，日本的共同体を所与の前提とした政治論議しか聞かれない今日においては，日本社会を「身体」として捉えるよりも，言葉に置き換えざるをえない，人間の目的意志に基づく構成体（Constitution）として描き出すことが必要だと思われる。加藤氏の言う通り，「感じるわたし」を基礎にした共同体を人為的に作って行くならば，個々人の利益と思想を積み上げる機能的な政治社会の日本を構想することで，「ぬめ」のようにまとわりつく「日本的なるもの」をはじめて振り払え，未来と国際社会に開けたナショナリズムを求められる気がする。

第二に，この本で加藤氏の提示したパン種のモデルは，考えるほど味わいがあって示唆に富んでいる。これに刺激されながら再考してみると，まず日本というパン種がある，すなわち成長するにせよ挫折するにせよ，「日本的なるもの」の元となる自生的社会はあるのだ，という点から議論が出発することは興味深い。さらに，「密閉された空間」として著者が表現する，「密閉性」，つまりパン種を囲い込む木枠が歴然と存在することが前提とされている点もまた，日本の特徴を表わしていると言えそうである。

アジアのナショナリズムは，西欧帝国主義に対して，まず反発することから始まり，屈服して迎合し，次第に西欧的近代そのものに挑戦するナショナリズムを探求していった点で共通性がみられ，その限りでは日本も同様である。しかし，アジアの他の地域は，日本とは異なって，西欧列強の植民地・従属地域となった。植民地化とはまず，これらの地域が外の世界と接している「枠」を西欧が強制的に壊すことであった。国民的共同体の母体となるべきものの枠，境界線が取り払われてしまったことこそが，近代の出発点であった。したがって，「自然」として所与に存在にしたかもしれない，地域の自生的「社会」は，圧倒的な西欧の進出によって侵され，壊された後，再構成することが課題となった。ナショナリズムは，帝国主義に抗しながら自生社会を探求するという二重の役割を担ったのである。

「文明開化」でもちろん西欧化は余儀なくされたけれども，鹿鳴館の時代でさえ，「西欧」から取り込むべきものを選択する主体性は，限定的なものであったにせよ，日本の側にあった。外の世界とは「枠」で区切られ社会があり，それが独立国家をもった意味であった。「黒船」に象徴される力と文明としての「西欧」が，加藤氏の議論の中でも抽象的なものにとどまりえているし，さらに言えば近代の日本文学と思想の中で一貫して議論されてきた「西欧」は，留学して出かけて行って初めて直面する，外の存在であった。「西欧」は「日本」の外の世界のものであったからこそ，個々，特定のイギリス人やフランス人ではなく，「西欧文明」一般が，問題となったのである。この点が，アジアでは珍しい，日本ナショナリズムの特徴である。例外は，敗戦後の占領した米軍の生の記憶が存続する時期であり，米軍基地と米兵が，加藤氏が批評で論じてきたように，具体的に日

本人の意識に姿を表わす。

他の植民地ナショナリズムが帝国の支配というがっちりとした「枠」との厳しい戦いの中で変容していったとすれば，帝国のくびきが不在の日本では，国際社会における相対的な日本の評価が変動すれば，ナショナリズムの内容が変動した。ここで，国際社会における相対的な日本の評価とは，世界全体の構成の中での日本のあり方自体より，何よりも国際的に日本の周辺で最も力を持つ大国との関係を指した。太平洋戦争前までは，日英関係であり，戦後は日米関係である。

そのように，弱い国としての日本のナショナリズムを刺激する状況が，いま失われつつある。豊かで強い国になり，その意味では他国に依存する必要がきわめて低くなった現在の日本では，個人のレベルで「日本人性」に関するアイデンティティの葛藤は非常に希薄になっている。「日本的なるもの」がマイナスである度合が相対的に低下し，「円」に象徴されるように，むしろプラスの価値に変わっているからである。加藤氏が『アメリカの影』で明確に描いた日米関係と日本のナショナリズムの連動という時代が，江藤淳の考えたのとは異なる形で終わり，日本のナショナリズムの一面での希薄化が進行するとともに，他方で，強い大国の主張が，意識化以前のナショナリズムとして国際的に現れているように思われる。

本書の「新」と「高」の時代にあたる，大正から昭和の前半については，論じる自信がないので，第三に，第6章で論じられる1945年の敗戦から1972年の「中」の時代について意見を述べて，この書評を結びたい。戦後の「日本という身体」について，著者は次のように書く。

> 1945年から60年まで，日本社会が無意識のうちにもっていた自己イメージはコナン・ドイル『失われた世界』のメープル・ホワイト・ランドふうにそこだけ大きく陥没し，外側から隔てられた凹型世界で，あの「永世中立国家」構想はその表現だった。
>
> これに対し，以後，73年まで続く高度成長期の日本社会の自己イメージは，それを反転させたギニア高地ふうの，そこだけ隆起し，やはり外界から隔てられた凸型世界で，「高度成長」にわたし達は，その昭和新山造成にも似た「身体的」な隆起，生長を感じていたはずである。
>
> いまの眼からみれば，安部公房が『砂の女』を書き，大江健三郎が『個人的な体験』を書いた60年代前半の一時期は，日本という木枠内世界の内圧と外圧が一致した，――陥没地形が隆起地形となる過程で平地状態が現出した――まれな時期だった。(10)

その後，「頭部を欠いた『身体』だけの『成長』」としての経済成長の時期を迎える。「それはコントロールの主体をもたない。その本質は野放図な，自己統御のない無限の成長（ただし木枠内での）」であり，それに「フタ」をするのは「自然」である，と。まさに，高度成長の時期を表現する上で，「身体」の比喩は力がある。

戦後の文学，あるいは知識人の手になる文壇は，軍国主義的な天皇制国家の下での，戦前左翼の転向体験と戦争体験，および敗戦とその後の体制変化の衝撃を受けて，近代日本を新たに論じ直そうとした。日本の近代は「なぜ天皇制ファシズムを生んだか」および「なぜ革命が起こらなかったのか」が課題となった。武田泰淳は『富士』を書き，丸山真男は『現代政治の思想と行動』を書いた。日本ナショナリズムの挫折から議論が始まり，加藤氏の指摘するように，「大」をめざさない日本国家は「中」をめざすしかないという結論が，文壇の主流になる。

知識人の議論が過去の重荷をどう振り落とすかにかかずりあっている間に，「大衆」の世界では，所得倍増論に象徴されるような，猛烈な経済成長への驀進，輸出国家日本を創出するためのナショナリズムの高揚が見られた。主体としての，都市第一世代の「サラリーマン」，彼らを支えた「専業主婦」とその子供たちを表現する「文学」などなかった。彼らの気概や抱負を語り，嬉しさや悲しみに言葉を与えたのは，文学ではなく，高度成長の三種の神器の一つであるテレビだった。大河テレビ小説，ホームドラマ，メロドラマ，そしてアニメはそうした機能をもった。「エコノミック・アニマル」と非難されるに至ったとしても，重苦しい国家から解放され，民主化された日本において，技術と努力でGNPというパイを大きくすれば国家も社会も個人も豊かになるという，大衆的ナショナリズムの時代であったと言えるのではないか。まさに，彼らは，アメリカに追いつけ追い越せと，「大」をめざしたのである。そして，吉本隆明の言った「大衆の原像」が，実は労働者として世界性を獲得するようなものではなかったことは言うまでもない。

「中のまどろみ」としての知識人の「ナショナリズムの不在」にもかかわらず，大衆のナショナリズムは経済生活の中で開花したのである。それは，啓蒙的知識人の時代の終焉でもあった。幕末と明治維新以来，国民国家建設の時代には，文学と知識人は指導的立場を担った。

ナショナリズムの発見と形成，ナショナルな文学の創造が目的でもあり，結果でもあった。同時に，「大衆」はともすれば「愚民」であり，克服されるべき野蛮であった。こうして，加藤氏が「大」の時代で描く日本のナショナリズムは，大衆の「日本」意識ではなく，知識人の，そして知識人の中枢を占めた旧武士階級の心情を反映した。

内村鑑三・新渡戸稲造のように，アメリカへ渡り，キリスト教と国際主義に開眼した人々もまた「武士道」を鋭く意識した。亀井俊介の文章を引用すれば，新渡戸は，

> 『武士道』(1900年）の中で，武士道を「国民全体の最高の理想」と見，その精神が「あらゆる社会層」に深く滲みこんでいることを強調してみせた。だが，なおかつ，彼は論述を進めるにつれて，それが「一種の階級精神」であり，それゆえに差別的な階級精神に反抗する時代の勢いにはさからえず，いま終焉を迎えつつあること，そして「これに代わるすぐれた道義」を探求しているのだがまだ見つからないことを，認めざるをえなかった。(11)

ナショナリズム論の主流が，例えば徳富蘇峰のような武士的精神によって担われ，それが日清・日露戦争を経て，ますます国家・国粋主義的な方向へ向かったとき，加藤氏が「しぼみ」の経験として論じる時代を迎える。著者は武者公路実篤の「桃色の室」を，大逆事件後，あえて天皇とも国家とも無関係な私の世界を主張する文学として論じる。その後を永井荷風が襲うという形になる。亀井もまた，同じように，日本国家に背を向ける作家として，内村鑑三の最愛の弟子であった有島武郎と，永井荷風を挙げる。夏目漱石は，ナショナリズム文学の流れの中ではいかにも座りの悪い人のようで，加藤氏は「しぼみ」「ゆるみ」の時代の作家と位置づけるが，「幸田露伴や夏目漱石を無視した感じがある」と亀井はわざわざ断わっている。(12) 江戸の「町っこ」の心情を背景に，武士的な明治の精神に直面しつつ，西欧文明と対峙する「日本人」を考えざるをえない人物が，漱石であった。国民に愛された漱石がナショナリズム文学の傍流たらざるをえなかったように，武士道的な国家中心のナショナリズムに向かっていく時代は，他の形での「日本的なるもの」の主張の可能性を摘み取っていく時代と重なっていった。だが，それもまた，まだ知識人の中の動きにとどまっている。

加藤氏の，戦後の高度成長の時代が「頭部のない」「コントロールのきかない」時代という表現は，知識人が社会の舵を取れなくなった時代だ，ということを意味しているのであろう。そうだとすれば，戦後の時代もなお，「知識人」が「頭部」であり，「大衆」が日本の「自然」であり，「秋吉台の石灰岩」の中からぬっと「身体」を表わしたということになるのだろうか。

私見を言えば，このとき，知識人の率いるナショナリズムの時代はそもそも終わっていたと思う。戦後直後の時期を除いて，工業化をまっしぐらに進んでいる平和的社会で，暴力的な社会主義革命はすでに遠いものだったし，農村が都市を包囲する戦略の中国革命を果たそうという考え自体が，後から考えればドン＝キホーテ的な夢にすぎなかったであろう。「大衆」は革命を不可避の選択肢とするような貧しい民衆ではなかった。高度成長で所得倍増が実現されていたときに，左翼的知識人としての経済学者が主張していたのとは逆に，「国家独占資本主義の下での不均等発展と日本の階級社会の中での大衆の貧窮化」という考え方自体が根拠を失っていた。

本書の区分に従えば，1972年の後，日本の革命勢力は，革命の根拠地を求めて，三里塚へ行き，貧しいアジアへ，そして「赤軍」として中東にまで足を伸ばしたが，肝心の日本社会の中心からは立ち去ってしまった。「なぜ日本には革命が起こらなかったのか」という従前からの宿題は，丸山真男が『忠誠と反逆』で論じたような，忠誠の対象たるものをすでに失った後に，もう一度，私たちに突きつけられている。左翼にせよ右翼にせよ，「前衛」としての，「知識人」を主体とした革命勢力の率いる革命としての日本の変革としてではなく，民主主義の政治的枠組の中での日本の変革，日本の実態としての民主主義の獲得という「民主化」の課題として突きつけられている。経済的豊かさの獲得は，何よりも「感じるわたし」を「大衆」であるところの一人一人の個人へと拡大した。「共同身体ではないところの個的身体」，疑えない不可疑の「感じるわたし」への「還元」を進めていくこと，「穴」へ落ちていくことだ，という加藤氏の「自由」を求める実存主義的宣言は，知識人の言葉に限らず，日本という社会にいつの間にか，制度的にも所属させられてしまっている私たち，「大衆」の「自由」を求める声と重なっている。

注

［以下，『日本という身体』は，「本書」と表記。］

（1） 本書，6頁。
（2） 本書，17頁。
（3） 本書，5頁。
（4） 本書，20−25頁。
（5） 加藤典洋『アメリカの影』（河出書房新社，1985年），71頁。
（6） 本書，30頁。
（7） 亀井俊介『ナショナリズムの文学 —— 明治精神の探求』（講談社学術文庫，1988年），第1章「『日本国家なる思想』の発足」参照。
（8） 同上書，21頁。
（9） 同上書，24頁。
（10） 本書，269頁。
（11） 亀井，上掲書，42頁。
（12） 本書，107−111頁，および亀井，上掲書，6頁。